

Title	「初学のころ」
Sub Title	
Author	田川, 純三(Tagawa, Junzo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.507- 509
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0507

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「ミステリーは読んだことがありませんが、ともかくご精進下さい」と二行。

おかしくもまことに有難く、先生の字がまた春の雲のように穏和な美しい字なので、額に入れて机の前に掛けています。

今後も不肖の生徒であり続けるであろうけれど、愈々のご精励を陰ながらお祈り申し上げる気持ちは人後に落ちないつもりです。

(フリーライター・昭和三十二年卒)

「初学のころ」

田川純三

こんど村松・藤田両先生が定年になるとお聞きして、時の経つのは早いものだという平凡な感慨がまず起りま

した。そういえば、学生だった私自身、まもなく五十五歳になり、定年が間近かに迫っているわけです。つぎにそうすると、私の学生時代、両先生とも三十をすぎたばかりの、いわば青年「老師」だったことになります。やはり、時の経過は「矢の如し」といべきでしょう。

昭和二十八年四月、私は塾に入学しました。当時、日吉では校舎はまだ進駐軍の兵舎跡を使っており、いわゆるカマボコ校舎でした。雨の日には、教室の移動には傘が必要でした。

入学当初から中国文学を専攻することに決めていた私は、当然中国語を履修することになりました。その第一日目、カマボコ校舎の窓からは、抜けるような青い空がひろがり、さわやかな風が春の匂いを運んでいました。そのなかを颯爽と現われたのが村松先生でした。

テキストは「急就篇」だったと思います。まず四声の練習から始った発音学習は、やがて有気音と無気音に進みました。村松先生の教授法は、掌に乗せたチョークの

粉が発音した時に飛ぶか飛ばないか——それを両者の別とするというものでした。なるほど、初心者にとって適切な方法だと悟りました。これについては、ある時、の前に紙片をかかげて、発音した時にそれがゆれ動くかどうかをめやすにするという方法もあると聞きました。

じっさいにやってみれば、どちらも適切な方法にちがいありません。ともかく、初学者にとってはやや奇妙な四声の反復練習とチョークの粉とばし、その二つともに村松先生独特の表情によって行なわれる発音指導について行くことが、私にとつての中国との出会いになりました。やがてNHKで「シルクロード」と「大黄河」をはじめとするドキュメンタリー番組を取材・制作するなど、今も中国とかかわり続けている私の出発点は、春のかまほこ校舎での発音練習だったということになります。

当時、発音記号としては、イギリスのウェード式などローマ字表記法もありましたが、村松先生の授業では注音符母が使われました。現在、中国で行なわれている拼

音によるローマ字表記法が始められたのは、一九五七年十二月の漢字拼音法案が制定公布されてからです。私の学生時代にはなかったわけです。おそらく、それ以降に中国語を学び始めた人たちの多くは、注音符母に親しんでいないことでしょう。

村松先生から注音符母を習ったことは、後年、なんども役立ちました。その原理が「反切法」にあることから、たとえば『漢書』などの註記を読むうえで役に立つわけです。また、この十一月に恒文社から黄文弼の『羅布淖爾考古記』を翻訳出版しましたが、その楼蘭の遺跡記号には注音符母が使われているのですたとえばLj、Li（Lは楼蘭の略号）などですが、読みこなすのに異和感がなかったというわけです。

二年からの学部では「原典講読」で『紅樓夢』を読みました。先生はどこか夢見るような表情での講読は印象的でした。そして、私の卒業後、当時の中国の『紅樓夢』研究の第一人者俞平伯が反右派闘争のなかで批判の

的にされた時、それについて語る先生の憂いにみちた表情が忘れられません。この対照的な二つの表情——その差が大きい分だけ、村松先生の『紅樓夢』にたいする思いが深いのだと思つたものです。

文革後、中国では『紅樓夢』はテレビ・ドラマ化され人気を博しました。そのオープン・セットとして使われた北京の大観園は、今、観光名所の一つになっています。園内を回れば、今昔の感があります。

申しわけないことですが、藤田先生とは旅行やコンパなどの酒席での記憶が多く、授業でのそれが少ないのです。しかし、これは私の方があまり熱心でなかったことが主たる原因にちがいない、今はただご寛恕を願う次第です。そのなかで、酒席などでそこにかかつている軸ものの文を読み下しては、私たち学生を感嘆させたことが印象に残っています。

近年、村松先生には『三田評論』の「三人閑談」の席でお目にかかり、また所用で電話をいただき、そのたび

に元気なご様子に接してよろこんでおります。いうまでもないことですが、今は六十半ばと言えば、まだまだ老年というわけではありません。こんごも、両先生にはご健康に留意されて、お仕事を続けられるよう願っています。

(NHKチーフ・ディレクター 昭和三十二年卒)

回想

「魯迅と史記と聊斎志異と」
——わが汗顔の記——

重 森 貝 崙

魯迅と史記と聊斎志異と——わが汗顔の記

人間とは仕方のないもので、そのときどきの現状を正確に認識することが、よほど不得手な生きものであるようだ——。他人は知らず、少なくとも私はそう思っている。